

お伽歌劇 《ドンブラコ》

小関康幸

1912(明治45)年に東京の歌舞伎座で初演され、1914(大正3)年、宝塚少女歌劇団の第1回公演の舞台を飾り、さらに浅草オペラなどでも上演されたお伽歌劇《ドンブラコ》は、戦後は1999(平成11)年9月に大阪音楽大学が行なった再現演奏会で取り上げられた記録があります。この作品については、すでに本誌第229号(2002年4月)の4〜5頁で触れた記事があるのですが、少し違う観点からご紹介しようと思いい立ちました。

北村季晴

北村季晴(きたむら・すえはる 1872〜1931年)。筆名は成於。幼い頃オルガンに親しみ音楽に興味をもち、1887(明治20)年、明治学院に入学するも、東京音楽学校(現東京藝術大学)師範部に入學し直し、1893(明治26)年同校卒業。父が主宰する学校を手伝ったり、青森県師範学校に赴任したりしましたが、

1899(明治32)年より長野県師範学校教諭となり、在職中にはのちに県歌となる《信濃の国》を作曲しました。その後東京に戻り、1905(明治38)年より三越音楽部主任になりました。以後、カントータ《露宮の夢》、お伽歌劇《ドンブラコ》などを作曲した人です。

お伽歌劇《ドンブラコ》の内容

北村は、お伽噺の『桃太郎』を題材に、自ら作詞・作曲を行ないました。桃太郎の誕生と門出、出征途上の場、鬼が島への打ち入り、鬼が島場内の段、そして帰郷した桃太郎の場が描かれています。作品全体を通して、童謡、口吟、里謡などの既存の曲が20曲採り入れられている点に特徴があります。鬼退治を果した桃太郎は、彼らとのあいだに講和条約を結び、祝宴まで開いています。当時の日本は、日米通商航海条約を締結して関税の不平等を撤廃したばかりでしたが、こうした動向が作詞に反映したのでしょうか？



ラストシーンは桃太郎の軍を日本軍になぞらえ、そこにはいつも天皇がついているから大丈夫と賛美して《君が代》を斉唱するよう創られています。このシーンこそが戦後の上演を遠ざけました。

《ドンブラコ》の楽譜とCD

楽譜は1912(明治45)年1月に共益商社書店から出版されました。当館所蔵分は1月1日発行です。同じ出版社から出された国立国会図書館所蔵分は、同年1月29日発行です。わずか1カ月のあいだに最低2回は発行されたことになりました。

国立国会図書館の「近代デジタルライブラリー」を見ると、楽譜の全ページが画像としてインターネットで読めます。発行日の確認

もこれで行なえまましたし、楽譜や科白部分も読めます。ですから、当館の楽譜にこだわらずこちらを利用するのも方法です。

しかしよく見ると、この両者には少しだけ相違点があるのです。それは(1)「簡単な舞台装置の例」の絵の有無(2)「本曲中に採取したる童謡口吟俚謡の類」一覧の有無で、これらはあるページの裏表に印刷されています(絵はカラー)。いずれも当館所蔵分にはあるのですが、近代デジタルライブラリーでは見当たりません。さて、最近この作品を収めたCDが出ました(宇野功芳指揮、アンサンブル・フィオレットイ)。丁寧な演奏が楽しめますし、通常はカットされる第4場も収録されています。しかも、ブックレットの解説は読み応えがあります。こちらも、参考にしてください。

参考文献・サイト

- ◆ 北村季晴「成於『ドンブラコ』(桃太郎)のお伽歌劇」共益商社、1912(請求記号●F90880)
- ◆ 北村季晴お伽歌劇『ドンブラコ』キング・インターナショナル KKCC-3023(請求記号●XD63017)
- ◆ 国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」(<http://kindai.ndl.go.jp/index.html>)